

劇団京すずめ『あばば食堂』講評

岡田 露子（大阪大学演劇学研究室）

伝えたいメッセージを強く持つ真面目な戯曲を、壮年期を中心にした俳優たちのこなれた演技や遊びを交えた演出で立ち上げた、バランスの整った公演だと感じました。

戯曲に関しては、「食の安全」という万人に共通する題材の中で、食堂現場で働く管理栄養士や調理師たちという現場労働者とその管理者の対立構造、さらに管理者の横暴により金銭的に被害を受ける弱者という明解な構造の中で物語を展開させた点が、わかりやすさに繋がりが良かったと思います。その中でも、現場労働者が自分たちの手で問題解決を試みるという自発性の重要性を強く訴えているように感じました。

疑問に思ったことを自分たちで調べて考え、解決を試みる姿勢はいつの時代も必要です。本公演では、「お喋り好きで人の良いパートのおばさんたち」という観客の身近によく居る人々が自主解決の動きを見せるという設定にした点が、観客の共感を呼んでいたように思います。

印象深い場面は中島みゆきの「地上の星」の替え歌をパートのおばさんたちで熱唱するところです。「地上の星」のメロディは多くの観客に「プロジェクトX」を連想させるでしょう。パートのおばさんたちが急に熱唱する行為自体は非常に喜劇的なのですが、一方でメロディのイメージの効果で彼女たちに終戦直後から高度経済成長期の労働者の姿が重ね合わせられる点で、物語に歴史の奥行きを付け加える効果を持つ場面でした。その付け加え方が押し付けがましくなかった点で、好感が持てました。

俳優は皆誠実に丁寧な演技をしていたと感じました。若い管理栄養士の気弱だけれど真摯な様子やパートのおばさんたちの現実感あふれる立ち姿、農家の吉田さんの純朴な雰囲気、黒川さんの含みを持ったいやらしい話し方、食堂の客として登場する男性の第三者としてのお気楽なものいいなど、舞台上のコントラストが明確になるように演じ分けられていた点が良かったと思います。

全体的に綺麗にまとまった作品で、見やすさがありました。しかし見やすさがそのまま作品の良さであるとは一概に言えない場合もあります。例えば、劇中での現場労働者たちによる告発で問題が解決するという勧善懲悪のわかりやすい結末は、現実世界の中で考えると整いすぎており嘘くさい側面も持つのではないのでしょうか。組合のアジテーション演劇ならばこの結末でも良いとは思いますが、今回のような不特定多数の観客を相手にする場合、現場労働者の完全勝利の結末にしないほうが、観客への問題提起となる可能性もあります。次回は綺麗に整ったバランスをどこかで破綻させ、観客の心中に違和感を呼び起こすような試みをしていても良いかもしれません。